

討 義

第 22 卷 第 9 號 昭和 11 年 9 月

浦戸港口漂砂問題研究及び港口計畫論

(第 22 卷 第 4 號 所載)

會員 工学士 古 河 順 治

山本工学士が標記論文に於て既往の調査にかゝる各般の資料を細大漏さず蒐集し、諸先覺の意見に批判検討を加へ、更に自ら行はれた調査の結果を擧げて、浦戸港港口問題に明快な解決の鍵を與へられた事は全く敬服の外ありません。蓋し漂砂は築港計畫の癥であつて、人工的に之を征服する事は難中の難とされて居ります。此の研究論文は實に浦戸港のみならず、一般に漂砂甚しき港灣の修築に對する貴重な資料であると存じます。

小生未だ漂砂に悩まされた経験も無く、又漂砂に就て深く研究もして居りませぬので、討議を書く柄でないと思ひますが、只次の 2, 3 の點に就て御教示願へれば幸と存じます。

(1) 南浦海岸に於ては甚しい時には僅か數日間に多量の砂が堆積し、又一瞬にして流失する様であります、之等の場合、例へば昭和 6 年 8 月 25, 26 日、昭和 5 年 11 月 26 日頃の氣象並に波 (swell) の状態を觀測記録した data はありませんか。

(2) 著者の支持せらるゝ第 2 計畫案は確かに良案であるが、著者が廣井博士案に對して「之は沖ノ礁岩礁列殊にその基部の岩礁を無視せるものにして、之を取除くの施工至難なりと言ふべし云々」と述べられて居られる所から推測すると(廣井博士案に於ける除礁の範圍は小生には不明なるも)著者支持案の A, B 礁及び沖ノ礁の除却は更に難工事で多額の工費を要すると思はれる。廣井氏計畫案と第 2 計畫案とは工費の上に幾何の開きがある見込でせうか。

(3) 修築原計畫案に依れば、退潮主流は仁井田濱を突いて外門洲を發達させ、更に流れの一部は防砂堤に衝つて益々逆流を助長し内門洲の北側突出を發達させると言ふ御説は尤もと考へられる。そこで之等の厄を避ける爲に、南堤は原計畫案通りにして置いて、北堤の位置方向を変へ、もつと南の地點から可及的流れに順応する様な線形を與へて突出し、延長を長くして現在の外門洲を越えた所で東に港口を開く様にしたならば、沖ノ礁を除去する費用が save され、逆流の爲に内門洲の發達する恐れもなく、又掃流作用に依つて航路及び港口の水深を維持することが出来るであらうと考へるが、港の實情に照して如何なものでせうか。

著者 准員 工学士 山 本 將 雄

浦戸港口の漂砂に對する拙論に對して古河工学士よりの討議に於て過分の御賛詞を頂き恐縮に堪へません。小論は筆者在学中の調査に基くものなるを以て充分なる研究の出來なかりし事を残念に思つてをりますが、往昔よりの難物たる本港漂砂に對する概況を明かにして諸方面より結論せる計畫基本方針を提唱して郷土開發の一助たらん事を願へるものであります。

浦戸港修築案に港口に於ける漂砂游動の性質に就ては内務省土木試験所に於て模型實驗によりて研究せられて